

監修

佐佐木信綱
柳田國男
新村出
山田孝雄
津田左右吉
和辻哲郎

古今和歌集

西下經一校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書

「古今和歌集」◎西下經一校註

昭和二十三年九月十月初版發行

昭和三十一年七月五日第五版發行

印刷所 株式會社東和印刷

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 二二〇圓

目次

解 説

一、文化の流れ	三
二、和歌史	六
三、名稱と組織	八
四、その成立	一
五、傳本	三
六、古今の調べ	六
七、古今のことば	一七
八、古今のころ	三三
九、古今集と貫之	三六
一〇、参考文献	元

凡例 三

本文 三

古今和歌集序 三

卷第一 春歌上 四

卷第二 春歌下 五

卷第三 夏歌 六

卷第四 秋歌上 七

卷第五 秋歌下 八

卷第六 冬歌 九

卷第七 賀歌 九

卷第八 離別歌 一〇

卷第九 羈旅歌 一〇

卷第十 物名 一一

卷第十一 戀歌一 一二

卷第十二 戀歌二 一六

卷第十三	戀歌三	一三六
卷第十四	戀歌四	一四四
卷第十五	戀歌五	一五五
卷第十六	哀傷歌	一六六
卷第十七	雜歌上	一七三
卷第十八	雜歌下	一八四
卷第十九	雜 躰	一九五
卷第二十	大歌所御歌	二〇八
	神あそびの歌	二〇九
	東 歌	二一〇
墨 滅 歌	二二三
古今和歌集序	二六六

古今和歌集

西下經一

解 説

一、文化の流れ

平安時代はおよそ四百年つづくが、その前半の文化を概観してみると、山紫水明の山城に規模の大きな平安京が營まれ、政治は藤原氏が攝政・關白または太政大臣としてこれに當り、その他左右大臣・大納言・中納言・參議さては藏人などの要職は、公卿をもつてあてられ、武人はこれに與らなかつた。内亂といふほどのものが、二三はあつたが、おほむね平和で、海外との交渉は活潑に行はれて、遣唐使は二回派遣され、三回目で中止となつた。新宗教は興り、數數の書物が編纂され、美術工藝も盛んであり、住居衣服も花やかであつた。

試みに、この時代に編纂された書物の名をあげてみると、歴史には續日本紀・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄などがあり、法制に關するものとしては、令義解や格式があり、詩文集としては、凌雲集・文華秀麗集・經國集などがあり、辭書には新撰字鏡や祕府略などがあつて、書目として日本國見在書目録があり、説話としては、日本靈異記や浦島子傳などがあり、紀行としては、圓仁の入唐求法巡禮行

記や圓珍の行歴抄があり、その他に古語拾遺・新撰姓氏錄・文鏡秘府論・三教指歸などがある。かうして書名をあげて見ただけで、この時代の文事がどんなに榮えてゐたかがわかるであらう。とにかく、平安時代初期の唐風文化は絢爛を極めてゐたと考へられるが、それをそのまま背景として古今集はできたのではなく、その絢爛たる文化に温くてやさしい情愛がこもるやうになつて、はじめて古今集ができたと考へられるのである。

平安文化の一大特色は優雅といふことであつた。優雅の内容をなすものは、はじめは輝やかしい唐風文化をもつてする優雅であつたが、それが次第に醇化された和風文化をもつてする優雅となるのである。古今集ができるころまでは、いはゆる唐風文化の時代であつて、その一端をあげると、まづ平安京の都制は、長安のそれを模したもので、宮門・都門・條坊の名稱までも唐風の文字が用ゐられ、そのなかで行はれる政治は、堯舜禹の徳治、夏殷周秦漢六朝の故事、その他漢土の歴史がしきりと參考せられ、公の儀禮もまた漢法または唐風に従ふところが多く、宮中の障子の繪にも、漢土の人物・風景・傳説などがとり扱はれ、この時代の倫理思想として著しいものは、易經・禮記に基づく謙虚の徳であり、大學は經學を中心とし、文學は漢詩文であり、歴史・法制の書も漢文で書かれた。以上は主として弘仁期を中心として起つた唐風文化であるが、時代の進むにつれてこの唐風文化がそのまま國內化し、一方では平假名・片假名・和歌・和文・大和繪・物語・日記など純和風も起り、その感じは物柔らかで情愛を反映してゐる。この傾向

は、延喜を中心として起り、段段發展してゆくのであるから、古今集は唐風優雅から和風優雅へ移り變る境にできたものといへるのである。

優雅は素朴と比較して考へるとわかり易い。素朴とは單純で感動の逞しい藝術であり、優雅とはやさしく上品で感情の細かな藝術である。素朴は人間の悩みを表に現はすが、優雅においては人間の悩みが内攻してゐる。素朴は生活の實相をよみ現はすが、優雅は風情を設けて歌を作る。素朴は眼の前の事實をしみじみと見て美を感じるが、優雅は夢にあこがれる。素朴は誠の精神に貫ぬかれるが、優雅は哀れの情にひたされる。素朴は戸外的であり、男性的であり、いはゆる、ますらをぶりであるのに對して、優雅は室内的であり、女性的であり、いはゆる、たをやめぶりである。もし萬葉集と古今集とを比較して、簡單にその傾向の差をいひ現はすならば、萬葉は素朴、古今は優雅であるといへよう。

古今集に現はれた優雅はうひうひしいものであるが、やがて圓熟して、源氏物語のやうな優雅に進み、さらに新古今集のやうな優雅にも進むのであるが、優雅が極まると幽玄となる。優雅が極まるとは、優雅の歴史的發展の間にさびが付き、神韻を帯びてくることであり、優雅のもつ花やかさがややくすんで、ときには枯淡閑寂にもなつてくるが、とにかくいひ知れぬ含蓄があつて奥深い感銘を與へるのである。これは文藝精神のうちに禪的悟道がしみこみ、思索と體驗の深みのなかから花やかなるものを眺めるやうになつた結果である。簡單にいふと、優雅が老成して幽玄となるのである。このやうに見てくると、

古今集は素朴から優雅へ轉換する初期の文藝精神をになふことになるのである。

二、和歌史

平安時代は延暦からはじまるが、延暦からおよそ百年間、すなはち大同・弘仁・天長・承和・嘉祥・仁壽・齊衡・天安・貞觀・元慶を経て仁和に至るまでは、和歌は一旦衰へ、弘仁を中心として漢詩文が榮え、その間に和歌がふたたび起る氣運が徐徐に養はれてゐた。承和になると、小野篁があらはれ、漢詩人であつて和歌も作つたが、その歌風は萬葉の遺風を繼ぐのではなくて、既に古今調の萌芽を示すのである。ついで文屋康秀・僧正遍昭・藤原關雄・小野貞樹・在原行平・同業平・素性法師・小野小町らの歌人があらはれ、嘉祥から仁和に至るまでは、いはゆる六歌仙の時代である。和歌を盛んにしたものは歌合である。歌合は、當時の有力な文化的な行事であつて、人人はこのために努力もし、喜憂もしたであらう。歌合として古いのは民部卿家歌合で、元慶・仁和のころ、在原行平によつて營まれてゐる。

仁和から寛平になると、和歌は俄かに隆昌に赴いた。まづ寛平のはじめには、寛平の御時きさいの宮の歌合が催された。后宮は光孝天皇の後宮にましまして、宇多天皇の御母にあたらせられ、このときの作者は、友則・當純・素性・興風・貫之・有岑・棟梁・美材・千里・是則・敏行・忠臣・菅根や宗于・元方・忠岑らで、古今集はこの歌合から五十六首を載せてゐる。つぎに寛平菊合は年代が不明であるが、趣向をこ

らした物合であつた。歌合につづいて、編纂歌集や個人歌集ができてくる。すなはち菅家萬葉集は寛平五年九月、道眞の編んだものであるが、これは右の后宫の歌合を材料としたもので、歌合の左右を上下の巻に収めてゐる。寛平六年四月二十五日、大江千里は勅を奉じて句題和歌を奉つてゐるが、これは千里集と見てもよい。およそ寛平年中に、宮中で即席の歌を召され、あるいは屏風歌を召され、古歌を奉らしめ給うたことは、古今集の詞書によつてあきらかである。

宇多天皇には、寛平九年七月三日御讓位になつたが、翌昌泰元年の秋には女郎花合を催し給うた。作者は時平・定方・貫之・躬恒・忠岑らである。同年十月廿日、上皇には近郊御遊獵のついでに、大和の宮瀧へ御幸になり、途中で奈良におはしたが、供奉の道眞・素性は歌をもつて御旅情を慰め奉つた。二十五日宮瀧を御賞覽になつて、勝地空しく過ぐべからずと仰せられたので、おの和歌を奉つた。

延喜二年三月二十日には飛香舎で藤花宴が催されたが、この時の御製が新古今集に見えてゐる。延喜三年十月十九日、躬恒は仰せによつて、女一の親王の御裳着の歌を奉つてゐる。同年十一月二十日、皇子御降誕になつて、因香朝臣の祝ひ奉る歌が古今集に見える。延喜五年二月、貫之・躬恒・素性は内裏の仰せによつて、右大將定國の四十賀の屏風歌を奉つてゐる。このやうに寛平から延喜にかけて、歌合も行はれ、歌集も編まれ、公事や私事について盛んに歌が作られるやうになつて、つひに歌集勅撰を仰せ下されるに至つたのであると考へられる。

三、名稱と組織

古今集の名稱は、正しくは古今和歌集といふべきであるが、略して古今集ともいふ。和の字は倭の字も書き、歌の字は調の字も書いてゐる。古今はコキンと讀むのが普通になつてゐるが、ココンと讀む説もある。その事は、古今集爲家抄といふ註釋書が大阪府立圖書館に傳はつてゐるが、その本に「古今に付て定家・家隆の二義あり。定家には古今とよみ、家隆には古今こととよむ也」とある。定家の方には、假名が振つてないがコキンと讀むのであらう。なほこのコキン・ココンについては、伊勢貞丈の安齋隨筆卷之六に説あるから引用しよう。

我が國朝廷の事物稱呼、多くは吳音を以て唱ふ。特に歌題歌書等には吳音を用ふる事なれば、古今も吳音にてココンと唱ふべき事なれども、昔より漢音にてコキンと唱へ來れり。一偏に心得べからず。

古今集の眞名序によると、古今集は、はじめに續萬葉集と稱へられ、部類を施してから古今和歌集と稱へられたことがわかる。日本書紀のつぎが續日本紀と稱へられ、古今集にさき立つて新撰萬葉集があることから考へると、古今集がはじめに續萬葉集と稱へられたのも尤もなことである。但し、本朝文粹や清輔本古今集、さては古今集筋切に載せてゐる眞名序には「曰續萬葉集」の五字がないので、續萬葉集といふ

名稱は、資料の上から見て十分確實でない。

古今とは、讀んで字のやうに、古と今とであつて、古とは萬葉に入らない古い歌、今とは延喜を中心として撰者たちの歌である。古今の文字は、平安時代のはじめから延喜に至るまで、いろいろの書物にしばしば用ゐられてゐるが、その多くは古今に通じて變らぬといふ意味である。それから考へると、古今集といふ名稱も、古今に通じて變らぬ集といふ意味になる。古今集の假名の序には「今もみそなはし、後の世にも傳はれとて」とあつて、後世に残したいといふ思召しであつたことがわかるし、また「大空の月を見るが如くに、古を仰ぎて今を戀ひざらめかも」と述べてゐるのは、この歌集が後世の人から必ず古典と仰がれるといふ確信を示してゐるといへよう。いやしくも歌集を後世に残さうと思ふなら、その時かぎりのものでなく、古今を通じて變らぬもの、すなはち普遍的價值をもつたものでなくてはならない。おそらく古今集の撰者たちは、その時にもてはやされ、そのうへ後世に残るやうな歌集を作らうと努力したにちがひない。さうすると、古今集とは古今に通じて變らぬ集といふ抱負と確信に基づいた名稱であるとも考へられる。

古今集は二十卷である。最初は巻物であつたと想像されるから、二十卷といふことは、まさしく二十本の巻物であつたと考へられる。別に假名と眞名の序が傳はつてゐるが、その序は奏覽されたのかどうか、もし奏覽されたとすると、兩序のうち、いづれであつたか、この點は明瞭を缺くのである。序の巻が歌の

卷に添うても、序は数の外であるから、二十一卷または二十二卷とはいはないのである。巻物は早く草子本に改められて、卷子と草子と二つの形式が並び行はれたと想像される。草子本に改められた時期はよくはわからないが、今日巻物として傳はる高野切、傳俊頼筆本、本阿彌切などよりも早くからであらう。草子本になつてからの冊数は一または二であつたと考へられる。

撰者は、序文にあるやうに、紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人である。古今集卷十六には友則の死を悲しむ歌があるので、友則はあまり撰修のことに當らなかつたのではないかと考へられるが、必ずしもさうではあるまい。假名序は貫之の撰、眞名序は紀淑望の撰といふことになつてゐる。

古今集の作者数はおよそ百二十餘である。古今集目録によると、男八十六人、僧十人、女二十五人、尼一人の計百二十二人であり、清輔本の計算によると、男八十九人、僧十人、女二十六人、計百二十四人である。歌の多い作者は、紀貫之九十五首、凡河内躬恒五十五首、紀友則四十五首、素性法師三十二首、在原業平三十首、壬生忠岑三十首、伊勢二十二首、藤原敏行十九首、清原深養父十八首、小野小町十八首、僧正遍昭十六首、藤原興風十六首で、撰者四人の歌を合せると、二百二十五首になつて、全體の約二割である。作者のうち、僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・大伴黒主は六歌仙といはれ、その作風が序のなかで批評されてゐる。作者のうちで時代の古いのは、安倍仲鷹、菅野高世であつて、歴史的に著名な人物は菅原道眞である。御製と御歌とは比較的に少い。

古今集の歌數は、假名序には、千うたとあるが、定家本で數へると、千百首、別に十一首（重出が一首ある）の墨滅歌が卷末に載せられてゐる。それを合せると千百十一首になる。なほ假名序の中に六義の例歌が六首ある。假名序の古註、並びに六歌仙の批評のなかにある例歌は、古今集の本文ではない。古本は歌の數が多少異なつてゐる。

歌の分類は、春・夏・秋・冬・賀・離別・歸旅・物名・戀・哀傷・雜・雜體・大歌所御歌の十三に分けて卷を立ててゐる。一卷のうちには季の順に従つて歌をならべ、あるいは題の同じものを一箇所に置くやうにしてゐる。例へば春上においては年内立春からはじめて、早春（霞、鶯、雪）若菜・青柳・歸雁・梅花・櫻花といふ順に歌を收め、雜上には瀧の歌九首をならべ、雜下には世の中の歌を二十首ばかりならべてゐる。

四、その成立

古今集撰修の勅を賜うたのは、延喜五年四月十八日で、奏上は延喜十三、四年のころと見たいのである。これについては異説もある。まづ成立年代を明らかにする資料をあげてみると、つぎのとほりである。

(イ) 假名序には、延喜五年四月十八日、紀友則以下に仰せられて、萬葉集に入らない古い歌、みづか